

目指せ 遺民博士 ―方法としての「ポケモン探し」―

東京大学大学院アジア文化研究専攻

顧 嘉晨

「テレビで映画をやってる！男の子が四人、線路の上を歩いている……僕ももう行かなくちゃ！」いつからだろうか。私の目標は、子供の頃に憧れていた「ポケモンマスター」から、「イミンハカセ（遺民博士）」へと変わっていった。国が滅び、遺された民、縮めて「遺民」、この世の不思議な集団、「江南」に「中州」に「日ノ本」に、その数は百、二百、三百……いや、それ以上かもしれない。

私の研究対象はまさにこの「遺民」と呼ばれている人たちである。では、そもそも「遺民」とは何だろうか？簡単に言えば、「遺民」とは、旧王朝が滅びた後も生き残り、あるいは義を守り、新王朝に仕えることを拒んだ人々を指す。日本人に馴染みのある概念に譬えるなら、主家を失った「浪人」（例えば『忠臣蔵』）が最も近い存在だろう。中でも私は、漢人政権の明から満洲政権の清へという王朝交替を生き抜いた遺民、さらには中国大陆から逃れ日本へ渡った遺民たちを主な研究対象としている。

その研究方法としては、主に文献学の手法を用いながら、フィールドワークも行う。歴史学者として遺民を追う作業は、私にとって「ポケモン探し」にとってもよく似ていると感じる。いわゆる「遺民博士」の仕事とは、歴史の闇に埋もれてしまった未知の遺民を発掘し、図鑑を完成させることに他ならない。まず、膨大な古籍の中から「野生」の遺民を探し出す。だが、注意を怠ると、彼らは逃げて行ってしまうかもしれない。そして、古籍だけではなく、山中の寺院、大名の屋敷、果ては墓地に至るまで、冒険の旅が必要になる。特に寺院においては、秘蔵の史料が外部に公開されることが少ない。まず「ミッション」をクリアしないとその隠し場所に入ることすら許されない場合もある。また、調査の途中では、遺民にゆかりのある庭園や橋、書道作品、石碑などに会うこともしばしば。そうした瞬間、時を超え、昔の遺民たちと交錯するかのような感覚に陥る。それは、まるで彼らと「対話」をしているような不思議なひとときである。こうして遺民を「捕まえる」ことに成功した後は、彼らを「遺民図鑑（遺民録）」に登録する。その上で、分析と研究を重ね、論文として発表することで図鑑の説明文を埋めていく。最終的には、パートナーである遺民と学術成果を携えて学会に発表――いわば「バトル」を行い、トレーナーやジムリーダー、さらには四天王に挑むことになる。ただし、ポケモンゲームと同様に、その遊び方や楽しみ方は人それぞれ。私の夢は「チャンピオン」になることではなく、図鑑を完成させ、本物の「遺民博士」となることである。

そもそも私の研究の旅は、修士課程で明の遺民・王夫之という人物を選んだことから始まった。王夫之は顧炎武、黄宗羲とともに「明末清初の三大師（三大儒）」と称され、遺民の中でも最も著名な三人のうちの一人である。私は彼らを明遺民の「御三家」と呼びたい（ちなみに、王夫之は当時あまり知られておらず、清末になって同郷の曾国藩によって発掘された人物である）。この「御三家」を初期パートナーとして修士論文を完成させたことで、私は本格的に「遺民博士」への旅路を歩み始めた。博士課程に進学する前、指導教官の小島毅博士から「顧君も曾国藩のように、将来王夫之に匹敵する遺民を発掘してほしい」と言われた。その言葉を胸に、博士課程では、さらに知られざる遺民たちを探し求めた。広く知られる南方の遺民だけではなく、北方の李楷や日本に逃れた戴曼公、張斐といった人物も対象とした。

さて、遺民を発掘する際、私がよく使うのは「芋づる式」という「遺民捕獲」のコツである。これは、東洋文化研究所の大木康博士から学んだ方法であり、遺民の友人たちもまた多くが遺民であることから、一人の遺民を見つけると、その繋がりを辿って次々と新たな遺民を発見できるというものである。この連鎖が続くと、時には非常にレアな、いわゆる「伝説遺民」に巡り会うこともある。特に未知の遺民や未発掘の史料を第一発見者として見つける瞬間は、新種のポケモンを発見した時のような感動がある。最近、私は、約四百年前に明の遺民が記した『宋遺民広録』という失われた書物を再発見した。この発掘過程は、まるで「古びた海図」を手に「最果ての孤島」へ向かい、ミュウと出会う旅のようだった。そういうわけで、遺民を探し出す過程はまさに「ポケモン探し」のようなもので、その過程には驚きと発見が詰まっており、まさしく楽しさに満ちている。

幾多の試練を乗り越え、遺民研究学界の「マスター」になるために、そして最高の「遺民博士」になるために、新たな出会いを繰り返しながら、遺民仲間たちとの旅は今日も続く。続いたら続く……